



真珠の水彩。
水のメディウム



透明水彩に特殊な効果を与えてくれるメディウム。それが、イリデッセントメディウム。真珠のような輝きと光沢、そしてきらめき感が出る。絵具と混ぜて使用するだけでなく、このメディウムのみを乾燥後の画面上に塗っても独特の効果を得られるだろう。他にも、絵具を自作したり、滲みを作ったり、タッチを変えたり、マスキングをして、白抜きをしたり。そんな新しいテクニックが新しい作風を生み、水彩の世界が拡がっていくのを体感していただきたい。お近くの画材店で、<ホルベイン水彩用メディウムシリーズ>

ホルベイン工業株式会社 東京都豊島区東池袋2-18-4 TEL.03(3983)9251 大阪府東大阪市上小阪1-3-28 TEL.06(6723)1554



holbein

www.holbein-works.co.jp

Holbein

東島毅

林洋子 || 文 森田兼次 || 写真*

都会から離れて深まる絵画の成熟



1989年、留学先のロンドン、ヴィクトリア&アルバート美術館内にあったロイヤル・カレッジ・オブ・アートのアトリエにて。同校ではチャップマン・ブラザースの兄ディノス(写真右)とも同級だった



左 Untitled (Drawing) -659 1989 紙にアクリル絵具 72×52cm 作家蔵

右 Untitled (Drawing) -Slone Square 1989 紙にアクリル絵具、鉛筆 56.5×75.5cm 作家蔵
ともに撮影 = 田村和隆

1988

「(ロンドンに留学し)ここではじめて本気で絵を描き始めたという実感を持ちました」

晴れの国といわれる岡山の晩秋は、名残の陽のひかりがまばゆく、収穫期を迎えた黄金色の田畑や澄んだ青空が視界に広がる。東島毅は、岡山市内に自宅兼アトリエを持つが、郊外にも元・倉庫を借りて工房(ファクトリー)とし、地元の若い作家数人とともに制作している。共同制作というわけではないが、作業の手助けやさりげない会話が交わされる。殺風景な室内と屋外の作業場、隣接するキャベツ畑。東島の絵画表面には、絵具のストロークに虫や枯れ草、小石がめり込んでいることがときどきあるが、それはこうした制作環境によるものと実感した。空、畑、地面、水 それらが画材、画家と共存している。訪れたのは昼間だったが、東島によれば「岡山の夜の星空」もまたインスピレーション源のひとつになっているという。

東島というと、ロンドン・ニューヨーク、ベルリンなど大都会との関連を連想しがちだが、意外なことに国内

UV88 1995
キャンパスに油彩
305×412cm 作家蔵

(タイトルのUVとは"Unclear
Thinking of Virtue" = 半透明
な曖昧な思考の美德、の意)



1997 「前年にVOCA賞と五島記念文化賞美術部門新人賞をダブル受賞し、
ニューヨーク生活を切り上げて帰国。岡山に定住して、日本での制作を再開しました」

では、東京での定住歴をほとんど持たない。九州・佐賀に生まれ、佐賀大学と筑波大学大学院に学んだ。学生時代の1980年代初頭から後半は、東京ではもの派やコンセプチュアル・アート全盛期から絵画の復活へと急激にアートシーンが移り変わっていた時期にあたる。そうした影響はと聞くと、「ただ絵を描くのが好きだったから描いていただけ。ペインターという職業が存在するとも考えていなかったし、最前線のアートシーンは自分とは無縁と思っていた」と、具象を描いていた。

卒業後、同級生たちが国内で公募展をベースに活動するには馴染めず、「絵以外のことを考えなくて済むように」海外へ出て制作を深める決断をする。「島国という親近感」もあり、1988年にロンドンに留学、ロイヤル・カレッジ・オブ・アートに在籍した。同校出身のデイヴィッド・ホックニの活躍や、同世代の若手の熱意に刺激され、急速に制作意欲が高まり、日中の油彩画制作以外に毎夜ドローイングを何枚も描く

という、制作漬けの日々を送る。

転機は偶然訪れる。ジュリアン・シュナーベルとの出会いである。「ニュー・ペインティングの旗手として80年代初頭から国際的に名をなしていたシュナーベル本人と会ったのは、一時帰国中の東京。そのまま一緒に箱根などに旅して意気投合し、1990年、彼のアシスタントとなるべくニューヨークへと移った。自らの制作にはなかなか時間を割けなくなっていたが、ニューヨークで暮らして「スケール感」が大きく変わった。あるいは物質的な強さのあるアトリエでの制作をとおして、「壁」に立ち向かう意識が高まり、同時に画面の大きさに恐怖心を持たなくなった。そ



FMF-L 2000 ミクストメディア、
キャンパス 458×351cm 作家蔵
岡山県・成羽町美術館「ART VISION Vol.5
東島毅 (2001年6月) 展示風景より



成熟した緑の世界 2005
キャンバスに油彩 290.9×218.2cm
大原美術館蔵
撮影 = 田村和隆

2005

「『絵画』というものの持つ力への確信と、後続世代と関わる喜びを実感しています」

その後、2002年の下半期をベ
ルリンで過ごす機会を得る。制作数
は限られたが、展覧会を見たり、建
築ラッシュの街のエネルギーを浴び
たりして創作意欲が高まった。岡山
に戻ると、自宅アトリエと郊外の
「工房」で黙々と大作を描き、05年の
大阪での個展や06年の京都でのグル
ープ展「ながめのある部屋」へとつな
がった。それらは90年代後半の作品
とは明らかに異なる、身体性や、光
や空気のゆらめきを感じさせる。
濃紺の連作に見られたソリッドな画
面に代わり、90年代前半の「ユー
ーク滞在期に見られた絵画的な筆

して、絵画の表面、テクスチャーに
対して敏感になる。当時の作品で
は、ストロークを生かした大画面に、
木や布、オブジェを貼り付けること
もあった。

ニューヨーク生活のあいだも、描く
気持ち先立つて展示には積極的に
なかつたが、作家の意思とは別に、
日本で作品が紹介される。「水戸ア

ニアル95絵画考 器と物差し」

(水戸芸術館現代美術センター、199
5)と、視ることのアレゴリー(199
5:絵画・彫刻の現在)「セゾン美術
館1995」の二つの展覧会によって、
一気に日本の美術関係者に名前が
知られた。1996年、VOCA賞
(第3回)と五島記念文化賞美術部門
新人賞の受賞が重なり、翌年帰国。

妻の職場の関係で岡山に定住し、
美術大学への就職など、30歳代後半
を迎えた東島を取り巻く環境は大
きく変わっていった。

帰国後、オブジェ類が作品表面か
ら消えていく。そうした物体を用い
ずとも、大画面の強度を確保でき
ると確信したからだ。身体サイズ
を超える200号、300号のキャ

ンバスを筆触で埋め尽くして生まれ
るシルバーや濃紺の画面。単に大画
面を目指しているのではなく、自分
ひとりでコントロールできる、身体
感覚に合ったサイズが300号級と
いう。2000年に国立国際美術館
で開催された個展では、90年代の制
作をゆるやかに振り返ることが試
みられ、濃紺の、スケール感豊かで
ソリッドな画面がひとつの完成型と
して提示された。

上 作家のイニシャル TH の文字が浮かぶ新作《自画像としてのT.H.》は、まさに東島のセルフ・ポートレート

下 最近では個人技を極めるよりも、ほかのアーティストとアトリエや展示の機会を共有することに関心が移ってきた。人とのコラボレーションや教育の可能性。どっしり構えてひたすら描き、絵画の行方、未来を見据える。「絵画は王様。努力するほど絵が厚くなる」絵を描く可能性が広がっている」との確信が、制作に余裕を持たせている(ともに西大寺の共同アトリエにて)[*]



触による線と面の絡み合いが戻ってきた。背景と線描による前景の対立ではなく、絵画の同一平面上で色彩や文字らしきものが自然に融合している。画面に浮かぶアルファベットの文字はメッセージ性を持ったものではないが、ストロークによる多重のレイヤー(層)のギャップを、見る者に強く認識させる。また、かつ



ては、整理番号程度にしか思っていない。なかつた「作品タイトルにも、近年は『成熟した緑の世界』『世界のものではなく』など、意識の変化が一点ごとに込められている。

この2月から、岡山県立美術館で大規模な個展が始まる。同館で現存作家の回顧展が開催されるのは初めてのことであり、ましてや現代

ひがしじま・つよし 1960年佐賀生まれ。86年、筑波大学大学院修士課程芸術研究科絵画専攻修了。88~90年、ロータリー・ファウンデーション奨学生として渡英、ロンドン、ロイヤル・カレッジ・オブ・アートに在籍。90年よりニューヨークで制作活動。96年、五島記念文化賞美術部門新人賞による海外研修で引き続きニューヨークに滞在。97年帰国し、京都造形芸術大学専任講師に(2000年より同大学美術・工芸学科助教授)02年、文化庁在外研修員としてベルリン滞在。主な個展に、第一生命南ギャラリー(東京、97、99年) アキライケダギャラリー(東京、神奈川、ベルリン。95、00、02、03年) 2000年「近作展-25 東島毅」(国立国際美術館、大阪) 01年「ART VISION Vol.5 東島毅」(成羽町美術館、岡山) 05年「東島毅 ときどき きき眼を変えてみる」(海岸通りギャラリー・CASO、大阪)ほか。グループ展では95年「水戸アニュアル'95 絵画考 器と物差し」(水戸芸術館現代美術センター、茨城)「視ることのアレゴリー-1995: 絵画・彫刻の現在」(セゾン美術館、東京) 96年「現代美術の展望VOCA展'96 新しい平面的作家たち」(上野の森美術館、東京) 00年「印象派と光の表現、Light in Modern モネ、ルノワールから現代まで」(ふくやま美術館、広島) 01年「先立未来 Futuro Anteriore」(ルイジ・ベッチ現代美術センター、イタリア・フィレンツェ) 04年「VOCA1994 2003 10年の受賞作品展」(大原美術館分館、岡山) 05年「五島記念文化財団設立15周年記念グループ展」(Bunkamura Gallery、東京)ほか。2007年2月9日 3月11日、岡山県立美術館で個展開催予定。

美術系というのは画期的なことだ。40歳代半ばでの回顧展。ミッドキャリアで自らの制作を振り返ることは、なによりも作家本人にとつての僥倖となるだろう。

はやしつよし(京都造形芸術大学教員)
2006年11月16日、岡山県西大寺の共同アトリエおよび岡山市内の作家自宅アトリエにて取材